岩永敏朗さん（神奈川県横浜市）

NPO法人 五つのパン いのちの木

編集部=文
text by KOTONONE
山本尚明=写真
photograph by Naoki Yamamoto

だれかの「弱さ」が、だれかの「仕事」になる。

カフェ「いのちの木」には、いろんな人の「仕事」がある。引きこもりがちだった青年は、ハンドドリップでコーヒーを淹れる。街のおばあちゃんたちは、編み物のブランドをつくった。脳性まひの若者が、地元の起業家と、ソーシャルビジネスを立ち上げる。みんなが「弱さ」を持っている。その「弱さ」を持ちよると、新しい仕事が生まれる。それが地域を動かす力になる。横浜に生まれた、新しい地域づくりの「芽」を見に行った。

きれいに整備された並木の商店街の一角に「いのちの木」がある

ミシンの音とコーヒーの薫りと

「カランカラン」。扉を開けると、耳に入るのはミシンの音。その合間に、楽しげな笑い声が響く。

ここは、横浜市都筑区にある多世代交流カフェ「いのちの木」。NPO法人「五つのパン」が運営している。

店の奥では、一人の青年が、コーヒーを一杯一杯、丁寧にハンドドリップで淹れている。彼は、引きこもりがちだったというが、「働きだして、すでに五年となります」と、理事の岩永敏朗さん。この場所の生みの親だ。「いのちの木」は、障害者、主婦、高齢者など、さまざまな「生きづらさ」を抱える、しかし、福祉の制度に乗らない人たちの「仕事」の場になっている。

商社マン、福祉に飛び込む

岩永さんは、もともとは電子部品会社の営業だった。会社の業績も、岩永さんの成績もよかった。傍から見れば、順風満帆の人生。でも、上司に怒鳴られ、お客と飲みたくもない酒を飲み、カプセルホテルで朝を迎えては、「妻や子ども、大切なものをないがしろにして、自分は何をしているんだ」と虚しくなる日々だったと、本人は振り返る。

岩永さんが「港北ニュータウン聖書バプテスト教会」を訪ねたのは、そんなときだった。自分が持つ「弱さ」を受け入れてもらえたことで、安らげる場所があることを知った。「苦しいときは、聖書に書かれた言葉を噛みしめて乗り切りました」。同教会の牧師・鹿毛独歩（かげとくほ）さんに、何度も悩みを聞いてもらったという。その鹿毛さんは、「みんなが幸せになれる街づくり」を教会のミッションとして、絵本の読み聞かせなどの活動を通して、地域の子どもたちを支援してきた。岩永さんは三九歳で会社を辞め、鹿毛さんの想いに応え、福祉の世界に身を投じた。

「五つのパン」を立ち上げ、地域の精神障害者への支援をはじめる。まずホームヘルパー事業「クリスチャンワーカーステーション」を、ついで地域活動支援センター「マローンおばさんの部屋」を開所した。

地域に暮らすさまざまな立場の人を支援したいと、その活動の枠を広げるようになったきっかけは、二〇一一年の東日本大震災だった。

制度の枠を越えて誰もが交流できる場所

震災のあと、岩永さんは、地域で孤立している高齢者の現状を知る。当時の都筑区は、平均年齢四〇歳。しかし、転入者の約七〇%は、子どもを頼ってくる高齢者だった。「二〇二五年には、横浜市の人口の四人に一人が後期高齢者になる」と岩永さん。高齢化が地域の大きな課題になってしまう。

「地域には、いろんな人がいる。若者も、子どもも、高齢者も、障害者も。彼らは単に支援を受けるだけの存在